

聖光

聖公会生野センター機関誌

ウルリム（響き）

第17号

2000年11月20日発行

題字：康秀峰

キムチ屋さんでの出会い

神崎和子

7月25日から約3週間、聖公会生野センターで、聖公会神学院の夏期実習を行ないました。

私が聖公会生野センターでの実習を希望したのは、聖公会神学院で、隣国、韓国・朝鮮の歴史を学び、また現在の日本社会における在日韓国・朝鮮人に対する様々な差別を学んだとき、以前大阪で仕事をしていた時のことを思い出したからです。かつての私は、私の傍らに、在日韓国・朝鮮人がいたにもかかわらず、その存在を知ろうとせず、見ようとしなかったのです。私はその自分の姿を思い出し、もう一度大阪へ行って、かつて見ようとしなかった人々に会いたい、そして、私なりに何かを受け止めたいと思いました。

私の実習は、鶴橋駅のすぐそばにあるキムチ屋での労働実習です。今では数少なくなった、戦後の闇市の雰囲気を残す市場内にキムチ屋はありました。市場内は多くの人が行き交い、雑多な中に活気が溢れています。私はキムチ屋の店員として働きました。キムチ屋を最初に始めたお母さんからの第一声を印象深く覚えています。「お姉ちゃん、どこの国？」最初、何を尋ねられているのか、ピンと来ませんでした。「お故郷（くに）はどこですか？」という意味かなと思い、「東京です」と答えました。彼女は「ああ、それはええわ、日本語だいじょうぶやね」という意外な答えが返ってきました。じつはこの質問にさまざまなことが含まれていることは、あとになって理解することになりました。

キムチ屋の店員は、私を含めて5人です。その内2人が在日韓国・朝鮮人、1人は中国の朝鮮族、もうひとりとは韓国人で15年前に日本人男性と結婚した人です。1軒のキムチ屋の店員に、これほどバラエティーに富んだ現実があるのです。

私はその店員のひとりと親しくなりました。年齢もほぼ同じでした。彼女は朝鮮学校を卒業しているので、朝鮮語の読み書きはできると教えてくれました。その彼女が5年前に日本に帰化したという話を

してくれました。なぜ彼女が40歳を過ぎて帰化したのか不思議に思い、私は「どうして帰化を選んだのですか」と尋ねると、彼女は「息子が一人で帰化するの嫌だというんよ」と答えました。息子さんは、大学の博士過程で勉強中です。自慢の息子さんで、息子さんのことを思い、彼女が受けてきた様々な差別の経験から息子さんの帰化のことを考えたのではないのでしょうか。彼女の年齢から考えてみると、朝鮮学校で学んだと言うことは、その中に彼女の何らかの意思を感じます。そして40歳半ばまで、在日韓国・朝鮮人として生きてきた彼女が、やむを得ない選択として帰化を選んだのです。それはひとえに、自分の受けてきた差別の経験、そして、未だに日本の社会で変わることのない差別があることを考えたとき、母として彼女が息子のためならばこの選択だったのでしょう。

私は戦争が終わって50数年たった今もなお、就職差別や結婚差別、その他の差別がある日本の社会の現実を重く受け止めています。日本中に彼女のように痛みながら決断した、多くの在日韓国・朝鮮人がいることを忘れてはいけません。

彼女の声や姿が、私の鶴橋のキムチ屋さんでの経験のなかにくっきりと刻み込まれています。

（かんざき・かずこ 聖公会神学院 神学生）

帰化について 「帰化」の語源は日本書紀の「内帰欽化」（内（日本）に帰依し、欽（大君＝天皇）の徳に触れて日本人化するという意味）にある。日本書紀は日本古代文化が朝鮮からの渡来人の影響を強く受けたことを隠し、日本の独自性、優越性を強調する立場をとっているためこの言葉が使われたとみられる。

国の創設期ならともかく、この国際化する現代世界において、「国籍取得」といわず、「帰化」という言葉を使い続けるのは、日本がいまだに異民族に対して排外的であり、自民族の優越性を主張するような時代錯誤の差別的な精神を持っているからではないだろうか。実際、帰化行政の現場では、「日本的な氏名」への変更の強制が行なわれたり、問題のない人物かどうか、生活、友人、仕事、近所の評判、日本語の読み書きまで、調べられる上、係官による、様々な圧力、嫌がらせがあるという。また、帰化したからといって、自分の出身を堂々と語ることが受け入れられる風土でもない。

異なる文化、歴史、精神性をもつ、一人の豊かな人間として、受け入れられるようになりたいものである。特に戦前戦後を通じて、常に排除しつつ利用してきた、在日韓国朝鮮人との関わりにおいてこのことが問われているのである。（宮嶋眞）

〈もくじは2ページです〉

10月13日、韓国の金大中大統領のノーベル平和賞受賞が決定した。南北首脳会談から4か月、また同じように、テレビや新聞各紙は、生野の有識者、団体幹部、街の人々の声をひろい、そのほとんどは受賞を讃えるものであった。

私は、もともと、いわゆる「職業政治家」の平和賞受賞には疑問をもっている。しかも、かつて日本の佐藤栄作氏が受賞したぐらいだから、もともと平和賞の価値を信じていない。金大統領が「信念と勇気」の人であり、南北和解に大きく貢献した人であることには、まったく異論はない。しかし、大統領の人格および政治的手腕と、平和賞の価値とは、別次元でしか考えられない。

金大中大統領は、韓国の中に民主主義を確立し、南北統一への道を大きく進展させた。しかし、金氏は「職業政治家」である。政治は権力による支配であり、ときに暴力をとともなうこともある。ひとりひとりを大切にしたい平和の実現は、特定の政治家によっては困難である。どこかでひとりひとりを切り捨てた上で、世間から評価される仕事が可能となる。いくら民衆の立場に立った政治家といっても、そこには自ずと限界がある。

受賞理由に挙げられている通り、彼には「倫理的強さ」があった。この点は、他国の為政者、ことに日本における、そのかけらもない政治家たちとくらべて、雲泥の差があるだ

ノーベル平和賞の値打ち

松山 献

ろう。その倫理的強さとは、まさにキリスト教信仰のことであり、彼の政治活動をずっと支えてきたのがそれである。その信仰のかたちは、彼の『獄中書簡』にみることができる。書簡からは、彼の強靱なキリスト教信仰、そして、それに裏打ちされた、全世界と自民族への平和への強い希求が読みとれる。

その中で彼は「キリスト教徒は個人の救済と社会の救済の二つの使命をおびて」と記している。これが一貫した彼の信念である。ところが、興味深いことに、ドイツの社会学者マックス・ウェーバーは『職業としての政治』の中で、「自分の魂の救済と他人の魂の救済は政治によってはなされない」と明言している。

おそらく自らの信仰から来る倫理的要請にどうしても反する政治的行為をせざるを得ないこともあっただろう。そのことは大統領自身ももっとも強く感じていることであり、自身の中に、大いなる葛藤があったに違いない。

平和賞は、個人の救済と社会の救済の二つの使命を、政治という権力支配によってではなく、別の方法によって成し遂げた人物に与えられるべきであろう。

彼の信仰と、信仰に基づく政治的手腕、その結果にたいして敬意を表するが、それは平和賞受賞の対象となるような性格のものではない。ウェーバーは同書において「自分が世間に対して捧げようとするものに比べて、現実の世の中が自分の立場からみて どんなに愚かであり卑俗であっても、断じて挫けない人間。どんな事態に直面しても『それにもかかわらず!』と言い切る自信のある人間。そういう人間だけが政治への『天職』を持つ」と記している。まさに、金大中大統領は、そのような天職を持つ職業政治家であり、それを証明するのが、獄中生活という苦難を経ての大統領就任、民主化そして南北首脳会談の実現であった。その意味からも、民族の悲願である南北統一は、政治によってしか為し得ないのであるから、受賞を契機に、職業政治家としての金大統領の今後に期待するものは、あまりにも大きいといえよう。

(まつやま・けん 日本聖公会京都聖ステパノ教会信徒)

キム ウン キュ
金銀珪さんのこと

文京洙

濟州島四・三事件と金銀珪さん 10月28日未明、金銀珪さんが亡くなられた。金銀珪さんは、四・三事件のころの濟州島で、地元紙「濟州新報」の記者としてこの事件の取材にあたった経験をもつ。当時、彼はまだ20代前半という若さだった。

濟州島四・三事件が起こったのは、朝鮮半島が植民地支配の頸木から解き放たれて3年目の1948年。その年の5月10日、米軍政下の南朝鮮では大韓民国の建国にむけた、「単独選挙」が予定されていた。よく知られているように、四・三事件は、この「単独選挙」に反対する武装蜂起として始まり、その鎮圧過程で3万人から5万人におよぶ犠牲者を出した悲劇であり、濟州島人は、多かれ少なかれ、この四・三事件にまつわる傷や重荷を背負いながら戦後の道のりを歩んできた。

四・三事件については、「済民日報」の10年余りにわたる長期の連載(四・三取材班「濟州島四・三事件①～⑤」新幹社)があり、金銀珪さんの証言もそこに記されている(同書第3巻)。金銀珪さんは、48年5月に濟州地区の米軍司令官として赴任したブラウン大佐に随行して取材にあたったが、証言はそのときの貴重な経験を回顧したものである。ちなみに、済民日報四・三取材班のキャップとして新聞史上に例を見ない長期連載をリードした梁祚勲(ヤン・ギョフン)さんは、金銀珪さんの甥にあたる人である。

「考える会」と金銀珪さん 私は、1998年の四・三事件50周年の頃から大阪の仲間たちと「四・三事件を考える会・大阪」という小さな集まりをもち、追悼行事を中心とした四・三事件関連の取組みに携わってきた。金銀珪さんは、そういう私たちのつたない取組みを立ち上がりの頃から支え、励まし、粘り強く私たちと歩みをともにした人である。

今年9月、私たちは、病床にある金銀珪さんを訪ねた。たまたま肺にたまった水を抜いて小康状態にあったようで、痛々しくやつれながらも、私

たちを暖かく迎え、四・三事件の頃の体験を語ってくださった。金銀珪さんは、日本に育ち、解放後、濟州にわたって教師となったが、これを辞して「濟州新報」の記者となり、さらに本土での紙一重の危険をくぐりぬけ釜山から大阪に逃れたのだった。そこには「濟州島と在日」にまつわる物語のひとつの象徴的事実が語られていた。

いまにして思えば、金銀珪さんは、死期の迫るのを感じて、そういう激動期を生き抜いた体験を私たちの世代に伝えることで、自身が生きたことの証の一つとしたかったのかもしれない。逆に、いま、私は、そういう彼の思いに触れえたことに、私たちの四・三事件の取組みの意味もあるのかもしれない、と感じている。金銀珪さんは私たちに語ることで自身の生の痕跡をとどめ、私たちはそのことを通して私たちがいまここにあることの手応えを感じることができたわけである。そのことへの感謝の思いとともに、あらためて、金銀珪さんのご冥福を心からお祈りする。

それは、在日としての私が濟州島人としてあることの確かな手応えとも繋がっている。

(むん・きよんす 立命館大学教授)



冬の漢拏山(ハルラサン。濟州島最高峰)

もくじ

1. 巻頭言 キムチ屋さんでの出会い
2. 時のしるし ノーベル平和賞の値打ち
3. 濟州島と在日① 金銀珪さんのこと
4. センターにかかわる人々 絵画教室初めての絵画展
5. チャリティー講演会・コンサート大成功
6. 朴慶南さん講演録 憎しみ偏見を溶かす人たち・固める人たち
8. パンチョギの家族日記 オンマの事務室
9. 本から「在日コリアン」を考える③ 「在日」が差別する時される時 ほるもん文化9
10. 写真と日誌でつづる 聖公会生野センターの活動
12. 各地の支援のはたらき・余韻

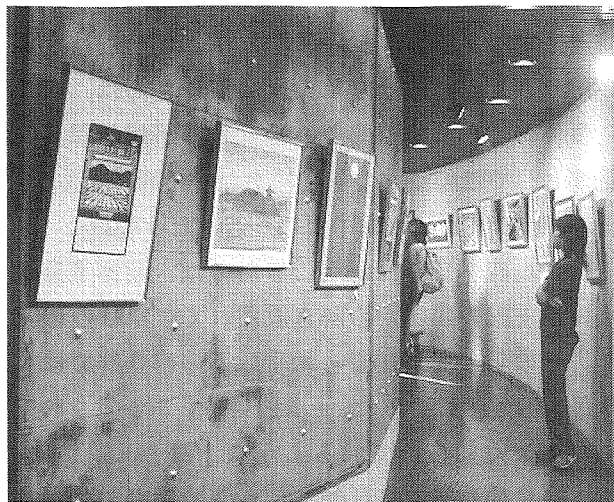
人に出会う 世界が広がる 絵画教室 初めての絵画展

澤 和美

クリン・もだん絵画展は突然動き出しました。今から思うと、とても短期間の準備だったんだなと思うと怖くなりますが、その時の私は、展覧会を開くということが、どういうことなのか想像がつかず一人のんきに楽しみにしていました。教室のみんなは、なにかが始まる予感がしていたのでしょうか、日に日に活気づいていきました。展覧会直前の絵画教室では興奮しながら一枚の紙にボスターの寄せ描きをしました。

絵画展の開催を迎え、額に入って壁に掛けられた絵は、スポットライトを受け、行儀よく並べられ、堂々と見えました。何人もの作品と一緒に並べた中で見ると、その作品（描いた人の個性）がハッキリと浮き上がって見えました。また、昼間窓から入る光の中で見るのと夜見るのとは違ったり、見る人の気分によっても違って見えるような気がして楽しかったです。

展覧会には、いろんな方が来てくださいました。この展覧会がなければ出会っていなかったかもしれません。来てくださった方と話をしていくうちに、人と出会うのは素敵だなと感じました。内弁慶で人と会う事を怖がっているところがあった私には貴重な経験でした。絵画展の会場にいることも不思議ですし、その中で会った人たちとも不思議な縁だなと感じました。この絵画教室に来るようになったきっかけも、3、4年振りに会った友人



に紹介され、子どもと接することができるならという気持ちからでした。毎週通ううちに絵画展を開くことになり、自分も絵を出展することになるとはびっくりです。私も教室のみんなも作品が知らない人にも見られ、今まで自分や教室の存在が、自分の中の小さな世界だったのが、広いところに連れ出され、世の中と繋がっているような気がしました。

この企画を発案し力を注いでくださった猪口さん、そして絵画教室のみんなをはじめ、この絵画展にかかわったすべての人たちに、感謝します。

(さわ・かずみ 聖公会生野センター絵画教室介護ボランティア、クリン・もだん絵画展実行委員)

クリン・もだん絵画展は、7年間の絵画教室初めての絵画展でした。2000年9月23日から10月1日まで、天王寺区にある應典院で開かれました。このきっかけには介護ボランティアの猪口さんのこの絵画教室の受講生の作品を多くの人にみてほしいという熱い思いがありました。また、受講生のほかにも、出品くださった方もあり、他にはない雰囲気絵画展となりました。期間中106人の方々がお越しくださり、今後の大きな財産になったと思います。(すずき)

平安女学院中学校・高等学校

〒602-8013 京都市上京区下立売室町下る

クリスマス・カンタータ

にお越しください

とき 2000年12月16日(土) 午後3時
ところ 平安女学院高校 新講堂

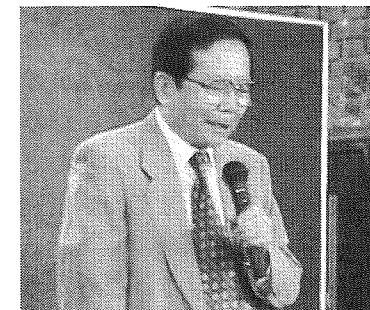
詳しくは 平安女学院高校宗教センター
TEL(075)414-8133 FAX(075)414-8119

チャリティー講演会・チャリティーコンサート大成功 感謝のうちに終了

聖公会生野センターの財政が厳しい中、後援会の働きの一環として、聖公会生野センターの支援のための講演会やコンサートが開催されました。

6月11日には堺聖テモテ教会で「Heart to Heart」と題して坂口茉莉さん、伊藤正さんらによる、オペラ「フィガロの結婚」の一部を披露するなどクラシックコンサートが聖公会生野センター大阪教区後援会・堺聖テモテ教会・聖公会生野センターの共催で行なわれ、6月25日は高槻聖マリア教会で黒崎錬太郎さんによるチャリティーコンサートが聖公会生野センター支援のため、行なわれました。7月23日には川口キリスト教会で木津川計さん（立命館大学教授）の講演会が「なぜ夫婦同伴文化は根付かなかったのか…人間らしく生きるために…」と題して川口キリスト教会の主催で開かれました。

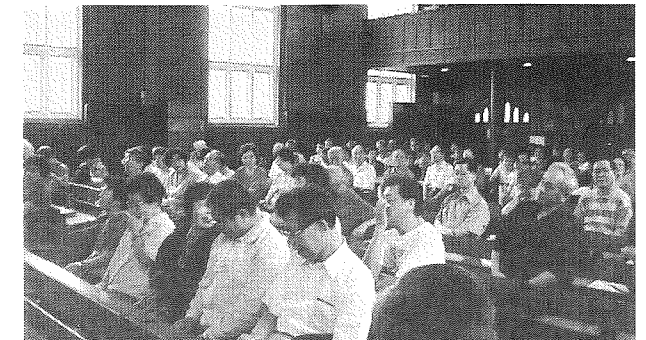
いずれの催しも、収益金や寄付金は、聖公会生野センター大阪教区後援会を通して、聖公会生野センターの活動のために献金されました。



7/23 木津川計さん講演会

様々な場面で、聖公会生野センターの活動を紹介する機会が与えられ、啓発活動の一助にもなったと思います。

聖公会生野センターの働きが多くの人々によって支えられて



7/23 木津川計さん講演会

いることを心より感謝いたします。

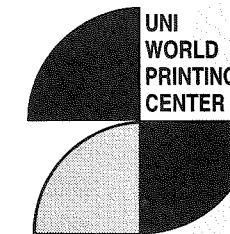
聖公会生野センターの諸活動は、人が人として尊重され共に生きるためになされる活動で、現場スタッフのみの活動ではなく、この活動を理解し支援するすべての人がつくりだす活動です。そのためにも、後援会員の皆さまには是非この活動を紹介する機会をつくり続けていただければと思います。

聖公会生野センターは、活動を通じた出会いからまた新たな取り組むべき課題に気づき、その活動はより広い範囲に広がっています。しかし、そのすべての課題に取り組むためには、より多くの人材が必要です。この活動を今後も展開していくためにより一層多くの方々のご理解とご支援の輪を求めています。

今後ともどうぞよろしくお願いたします。

(鈴木恵一)

パンフ・カタログ・ビラ・書籍等



おもしろ まじめの印刷屋です。

株式会社 **ユニワールド印刷センター**

〒530-0025 大阪・北・扇町・2・6・12 TEL.06-6363-4567 FAX.06-6363-4568

Eメール: aag12000@pop02.odn.ne.jp

憎しみ偏見を 溶かす人たち・固める人たち

石原都知事「三国人」発言を問う

9月1日の関東大震災朝鮮人虐殺を憶えて毎年秋に開催している、共に生きるを考える集い。今年は朴慶南さん（ばく・きよんなむ エッセイスト・石原やめろネットワーク呼びかけ人）をお迎えして、「憎しみ偏見を 溶かす人たち・固める人たち」と題して、講演会を行ないました。

みなさんアンニョン ハシムニカ。世界にはいろんな挨拶の言葉がありますが、朝鮮語では出会うのときも別れのときもアンニョンという言葉を使います。これは漢字では安寧と書いて、健康でおられるようにという気持ちがこもっています。さて、石原東京都知事は、4月9日の陸上自衛隊記念行事で「不法入国した多くの三国人、外国人が非常に凶悪な犯罪を繰り返している」と発言しました。そして、「災害が起きて三国人が騒擾を起こしたときには、治安出動を願いたい」とも言いました。この発言を聞いて私は背筋が凍るような恐ろしさを感じました。それは、関東大震災の朝鮮人虐殺を思い起こさせられたからです。災害が起きたとき人々が不安からパニックにならないようにするのが自治体のトップのすべきことなのに、逆に不安をあおるような発言をしました。

今年で関東大震災から77年ですが、このときの朝鮮人虐殺の事実を知ったのは、高校生のとき読んだ本の中ででした。朝鮮人が井戸に毒を入れたというデマが流され、それを信じた一般の人たち



9月9日(土) は大阪・聖ガブリエル教会、10日(日) は奈良・奈良キリスト教会を会場に行い、両日あわせて、100人ほどの参加がありました。

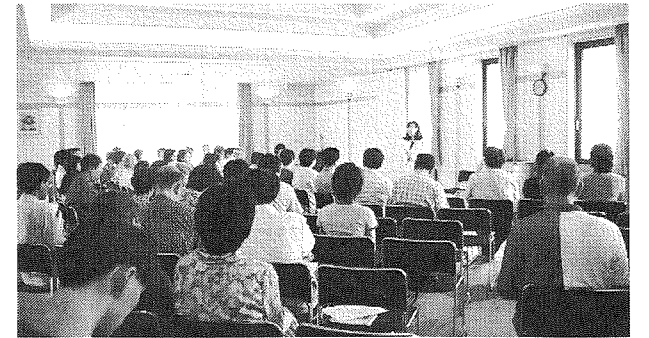
紙面の都合上、お話のすべてを掲載することができませんが、その一部をご紹介します。

(編集部)

が自警団を作って竹やりや出刃包丁などで朝鮮人を殺していった。軍隊や警察だけでなく、一般の人までもが殺したという記述を読んだとき足元が崩れ落ちるようなショックを受けました。もし、また何かパニックが起きるようなことがあったら、私も朝鮮人ということだけで、殺されそうになるかもしれない。そのとき日本人の友だちは私を助けてくれるだろうか？と不安になりました。父に聞いた話では私の祖父は当時東京に住んでいて殺されかけたのを下水道にもぐって、かろうじて九死に一生を得たそうです。祖父が殺されてたら、私は存在していないわけですから、その恐怖は体に染み付いているんです。デマは自然発生的に流れたのではなく、意図的に内務省が流しました。朝鮮では、三一独立運動（1919）が起き、日本でも米騒動（1918）など民衆が動いている。だからこういう時に抑えておかないと危ないと思ったのでしょう。殺されたのは朝鮮人だけじゃないんですね。大杉栄ら社会主義者も虐殺されました。

あの石原都知事の暴言は、弱いものいじめですよ。最近日本にきた外国人は言葉が不自由です。そして「不法滞在」とされ、自分の権利を主張しにくい人たちに向かって「あいつらは犯罪者だ」と決めつけてしまう石原。私は日本語ができるから大丈夫と逃げってしまうようだったら、そういう自分を許せません。大変だった在日が、もっと大変な思いをしている人たちの声を代弁していこうと、今私は石原やめろネットワークの呼びかけ人をしています。

石原都知事を、偏見を固める人の代表にしてお話を進めていきたいと思っています。石原都知事は冷たい人です。辛い立場にある人への想像力や思い



なわれたわけです。

昨年、ガイドライン法案が成立し、ついに日本は戦争ができる国になってしまいました。このようなことを既成事実として慣らされていくことが怖いと思います。4月、石原都知事が練馬の自衛隊の前で演説した日の同じ新聞の紙面には、朝鮮の南北首脳会談が決定したという記事が載っていました。朝鮮半島は和平に向かって歩んでいるのに、日本は時代を逆行しているようです。石原は「天皇は元首だ」とか「中国は分裂したらいい」とか言いたい放題ですが、彼の暴言に慣らされてしまっていけない。しっかり向き合って声を挙げていかなければいけません。

でも、どうしてこんな人になっちゃったのかと思うんですね。石原さん、偏見で凝り固まっちゃってるんですね。友だちだったら、じっくり小さい頃からの話を聞いて、どうしてそんな偏った考えを持ったのか、その偏見を溶かしてあげたいと思いますが、石原さんは、まあ私と友だちになりたいとは思わないでしょうね。

こんどは溶かす人の話をしたいと思います。私は、こんなひどい人があるという話よりも、こんな素敵な人があるという話の方が好きです。希望を、闇の中に光を見つけたいと思っています…。

掲載できなかったお話をもっと知りたい方へ…

憎しみ・偏見を溶かす人のお話は朴慶南さんが書かれた本にたくさん紹介されていますので、ぜひ読んでいただけたらと思います。聖公会生野センターまでお問い合わせください。(編集部)

やりがまったくなく、踏みつけにしてはばかりません。たとえば重度障害者の施設を訪問したときに「この人たちには人格はあるのか。安楽死というのを考えてもいいんじゃないか」と言いましたね。ご家族・本人はどんな気がするでしょう。誰にでも尊厳があります。それを高いところから、「人格はあるのか」「安楽死を考えたほうが」という冷たさ。また、かつて“従軍慰安婦”と言う形で「この言葉は嫌ですが」大変苦勞した女性に対して、「彼女たちは、昔は体を使って金を稼いだ。もう体はつかえないから名誉と引き換えに金を稼ごうとしている」と言う人です。

また彼は非常に悪賢い人でもあります。今、不況が続いて社会不安が高まっています。そういう時、人は苛立ったり鬱屈した気持ちが生じます。そういうものを外国人や、より弱いものに向け、はけ口にさせる。これは独裁者の常套手段です。ヒトラーやオーストリアのハイダー自由党党首もそうです。言葉の使い方が巧みで、大衆を扇動します。ずばずば言ってくれる、リーダーシップがあると評されています。しかしその石原が何を考え、どこに私たちを引っぱって行こうとしているのか見究め、考えなければ大変なことになります。

9月3日、東京で大演習がありました。すごかったですよ。銀座に戦車が繰り出しました。三宅島の島民を東京都は、急に全島避難させましたね。それは、石原都知事が一年前からやりたかった大演習が中止になったら困るからだったようです。去年までは自衛隊が出て500人ほどで、災害訓練という感じでした。ところが今年は7100人の自衛隊員が出ました。「陸海空3軍の総司令官として森首相に統率して頂いて…」なんてことを石原さんは言ってました。「総司令官」なんて、戦争中の気分なんですか。そして、銀座は朝8時半から封鎖され、防災訓練だと言っていました。街中を戦車が走り、戦闘機が編隊を組んで飛んでいました。でも実際に災害がおきたとき、戦車や戦闘機が何のために必要なんですか。神戸のときもそうでしたけど、まず最初に必要なのは近隣の人同士がどうやって助け合うかということです。9月3日は、石原都知事がやりたいと言っていた、まさに「陸海空3軍」の防衛訓練・軍事演習がおこ

엄마 사무실 온마의사무실



- ①ノリバン行かへん、ノリバン行かへん。ノリバンおもしろくない。近頃いつもこうだね。
- ②ハエリン、アッパと家にいる？ オンマの事務室に行く？ オンマの事務室。
- ③今日行ってみればわかるでしょう、二度と事務室に行こうと言わないから。昼寝するところもないんだから。オンマがアイスクリームも買って来て、絵本も読んでくれ。そうでしょアッパ。
- ④紙、糊、はさみ、テープ、ステッカー、色紙、鉛筆、絵本
- ⑥どういう事がしら。ずっと歩いているのに背負ってくれとも言わないわ。



注：オンマ：子ども言葉でお母ちゃんのこと
 アッパ：子ども言葉でお父ちゃんのこと
 ノリバン：直訳すると「遊びの部屋」。
 地域の中にある託児所のこと。

作者：崔正鉉（ちえ・じょんひょん）
 パンチョギ（もう一方）の愛称で親しまれる。1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。

- ⑦ハエリン、疲れた？ 大丈夫。
- ⑧オンマが毎朝ハエリンを起こして、洗面をさせ、ご飯食べさせ、ノリバンに送って、こんなに疲れて事務室に行くんだよ。オンマ疲れるね？
- ⑨こんなに疲れたオンマをハエリンがどうして手伝いできるというの？
- ⑩毎日事務室まで連れて行ってあげるわ。行きながら話もしてあげるから。

聖公会生野センター

韓国語教室

毎週火曜日 午後7:00~8:30
入門・初級・中級・上級

絵画教室

毎週水曜日 午後7:00~8:30

本から「在日コリアン」を考える③

高二三

「在日」が差別する時される時 ほるもん文化 第9号

ほるもん文化編集委員会・編
新幹社刊
定価1700円+税



不定期で、ほぼ1年に1回出てきた「ほるもん文化」も第9号。パトロンもない雑誌をよくここまで……。感慨深いものがある。読者のみなさん、執筆者の皆さん、ありがとうございます。

支えてくださった皆さんのおかげです。

しかし、第9号ほど企画から刊行までの道りが長くきびしかったことはない。それでいてなお不完全燃焼の感をぬぐいきれない気持ちなのである。うーん、なんと云えばよいのか。

「ほるもん文化」を始めたとき、おおよそこうしようと決めたことがいくつかある。そのひとつが在日朝鮮人の中に内包されてきた内なる差別の問題を1回は取り上げよう、ということだった。最終号にという声もあったが、それでは「在日」に未来がないような印象になってしまう。それでいて、早急に特集化すると、かつて日本を席卷し、今も根強く残っている日本人の持つ「醜い韓国人」観を増幅させてしまうのではないかと、という懸念があった。出版するタイミングがむずかしかった。

タイミングの問題性もさることながら、やはり、「難産」の最大の原因は在日朝鮮人自身が持つ自己批判精神の欠如があげられるだろう。なかでも、日本の中では朝鮮人・マイノリティーと差別されながらも在日社会で、地域で、職場で、家庭で「権力」を持っている者たちの自己批判精神の欠如である。自らが差別の被害者でありながら、知らず知らずのうちに加害的位置にあることすら気づかず、戦後（解放後）を生きてきた、と言えよう。また、

気が付いていたにもかかわらず、自らの既得権益を守ろうとして見て見ぬふりをしたり、詭弁を弄したりして、内なる差別を再生産してきたと言えよう。そのことの罪は重い。またそれは在日社会が本当に民主化されていない証左にほかならない。

今号でも特に力が入っていたのは当事者たちの原稿である。朴和美さんの「怒ってくれてありがとう—在日の女と男」、ペギンパンさんの「クワンホの行方—障害児を朝鮮学校に入れて」は、個人的に感動した文章である。特にこの2本の文章は、より多くの人に読んでもらいたいと思う文章である。しかし、差別される当事者は書いても、差別する側が書けないという在日のおかれている現状は残ってしまった。それが、なんとなく不完全燃焼のような気分させているのだろう。

また、企画の段階では様々な差別の形が論じられ、原稿依頼もいろいろな人にしたのだが、何人かの人が努力の甲斐もなく、どうしても書けない、とギブアップしてきた。それらの足りない部分を補おうとして「座談会」を組んだが、座談会というのはどんなに真剣に論じても、つっこみが浅くなり、通りいっぺんになってしまうものである。それも不満足な気分の一つなのかもしれない。

在日コリアンを悪く言うためにではなく、在日コリアンが人類の未来のために、自らの内なる差別性を放置してきたことを反省する、そんな観点をもっと強調されていいと思う。差別の被害、加害の問題はいつでもついてくる問題で、それをめぐる議論や実践が大切なことはいままでもない。その上で、在日が在日として「差別」をキーワードとして正義や平等を追求したり、民主主義を追求したりすることの意味を考えるべきである。差別されてきた者こそ誰よりも差別に敏感でなければならず、差別することを克服できるはずだから。21世紀を前に、在日のあり方を思う。

(こ・いーさむ 新幹社代表)

『「在日」が差別する時される時-ほるもん文化 第9号』は 聖公会生野センターでも取り扱っています。

- 1月
- 8 精神障害者支援の会HIT 全体協議会
 - 14 聖公会生野センター 運営委員会
 - 15 精神障害者の生活の場づくりを進める会 茶話会
 - 16 聖公会長田センター総括集会
 - 17 聖公会社会宣教活動関係者懇談会 (神戸)
 - 19 生野地域活動サポートセンター学習会 (毎月1回)
 - 21 こみち寄席 (第45回・奇数月第3金曜日)
 - 22 聖公会生野センター大阪教区後援会理事会
 - 28 サラダバー運営委員会 (毎月1回)
- 2月
- 5 GKNJ理事会 (Global Korean Network Japan)
 - 6 新幹社大阪新年会
 - 16 相楽デイセンター訪問 (京都府木津町)
 - 18 生野第3作業所設立準備会
 - 14 聖公会生野センター 運営委員会
 - 21 生野作業所運営委員会 (毎月1回)
 - 26 精神障害者の生活の場づくりを進める会くふすか 夜のたまり場 (毎月1回)
- 3月
- 1 生野精神保健ボランティア講座
 - 4 近畿グループホームスタッフ研修会
 - 5 日韓の歴史を考える集い (大阪聖愛教会)
 - 11 SCM生野・釜ヶ崎現場研修 (~20)
 - 11 生野地域活動サポートセンター総会
 - 18 ヨンドンハルマンジェ鑑賞旅行 (~20 韓国・済州島)
 - 22 精神障害者の生活の場づくりを進める会くふすか ボウリング
 - 26 絵画教室写生会 (枚岡公園)
- 4月
- 4 韓国語教室2000年度開講 (毎週火曜日)
 - 5 絵画教室2000年度開講 (毎週水曜日)
 - 9 済州島4.3事件52周年大阪集会
 - 15 玄月氏芥川賞受賞記念会
 - 20 大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会
 - 22 阪神教育闘争52周年民族教育集会
 - 27 精神障害者地域生活支援センターすいすい運営委員会
 - 28 大韓聖公会分かち合いの家協議会 大阪研修 (~7/25)

写真と日誌でつづる聖公会生野センターの活動 2000年1月~10月



日韓の歴史を考える集い
3.1朝鮮独立運動を憶えて
3/5 大阪聖愛教会
地域とともに歩む信仰共同体
大韓聖公会分かち合いの家10年から学ぶこと
香山洋人さん (司祭・立教大学チャプレン)



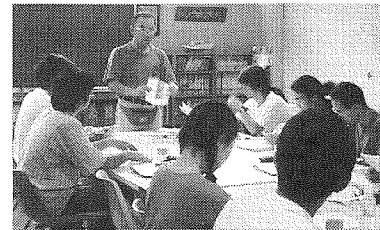
ヨンドンハルマンジェ鑑賞旅行
済州島 3/18-20



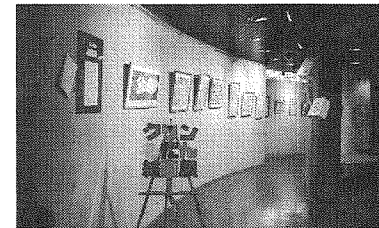
絵画教室 写生会
枚岡公園 3/26



共に生きるを考える集い
9.1関東大震災朝鮮人虐殺を憶えて
9/9・10 聖ガブリエル教会・奈良基督教会
憎しみ偏見を溶かす人たち・固める人たち
石原都知事「三国人」発言を問う
朴慶南さん (エッセイスト)

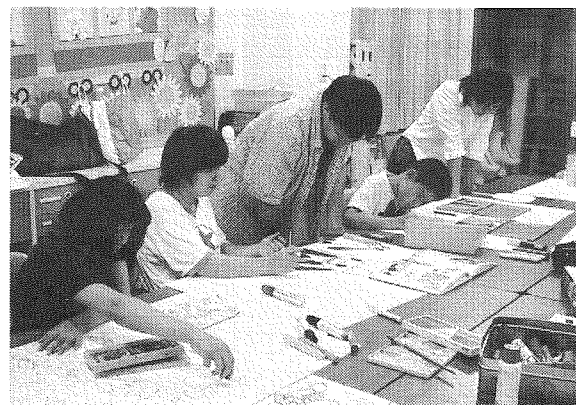


ウイリアムス神学館
生野・釜ヶ崎夏期実習 7/13-19



クリン・もだん絵画展
9/23~10/1 應典院

- 5月
- 9 日本製鉄戦後補償裁判傍聴
 - 14 韓国社会福祉機関視察・国際シンポジウム参加 (~21)
 - 23 日本聖公会管区総会 (~25)
 - 29 相楽作業所・デイセンター訪問 (京都府木津町・精華町)
 - 30 すいすい・中道地区住民協議会
- 6月
- 7 日本聖公会婦人会常議員会
 - 11 堺聖テモテ教会チャリティーコンサート
 - 19 韓国社会福祉法人「子どもたちと未来」大阪研修 (~23)
 - 25 大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会懇談会
 - 25 高槻聖マリヤ教会チャリティーコンサート
- 7月
- 1 生野第3作業所「画布」開所
 - 2 聖公会社会宣教活動関係者懇談会 (~3)
 - 13 ウイリアムス神学館 生野・釜ヶ崎夏期実習 (~19)
 - 16 ミッション21発題 (高槻聖マリヤ教会)
 - 23 木津川計氏講演会 (川口基督教会)
 - 25 聖公会神学院 夏期実習 (~8/13)
- 8月
- 10 神戸松蔭女学院放送部合宿 (~12)
 - 16 聖公会日韓青年交流プログラム (~23)
 - 21 南淡中学校解放学級生野現場研修
 - 22 精神保健講演会 (阿倍野)
 - 25 日本聖公会全国青年大会 (~28 野辺山)
- 9月
- 1 作業所トータスハウス1泊キャンプ
 - 2 小規模作業所わんさか開所式
 - 3 東洋大学工学部学生・教員生野現場研修
 - 9 共に生きるを考える集い (~10大阪・奈良)
 - 14 大阪教区連合男子会一泊修養会通訳 (~15)
 - 15 京都教区信徒の集い (~16)
 - 23 クリン・もだん絵画展 (~10/1)
- 10月
- 9 大阪教区在日韓国朝鮮人宣教協働委員会学習会 (丹波マンガン記念館)
 - 13 京都教区秋のキリスト教講座 (20.27)



絵画教室 毎週水曜日 19:00~21:00

2000年の聖公会生野センターは、精神障害者の地域生活支援が大きな活動でした。昨年からはじめた「精神障害者地域生活支援センターすいすい」は、地域住民との話し合いがまとまり、ことしは、活動の充実に向けての取り組みが本格的に始まりました。そしてこれからも必要となるサービスを生み出すNPO法人を設立する準備をすすめています。

また今年には特に生野地域での現場研修をたくさん受け入れました。大韓聖公会の分かち合いの家協議会からの3か月の現場研修を始めとして、韓国の子どもたちと未来・ウイリアムス神学館・聖公会神学院とたくさんの

方々が生野を訪れ、生活をしながら、学びを深めました。

そして、これまで7年間続けてきた絵画教室初めて絵画展を行いました。これは、センターに関わる人の広がりがあってこそできたものと思っています。

聖公会生野センターの活動は、様々な分野にまたがっていますが、ひとりひとりの生活の選択肢を増やすこと、より広がりをもった生活につながっていると考えています。これからも、活動を通して出会った人々と「ともに課題を担い合う社会」をつくっていきたくと思っています。今後ともご支援よろしくお願いいたします。

(鈴木恵一)



韓国語教室 毎週火曜日 19:00~21:00

私たちにできる共生・共歩

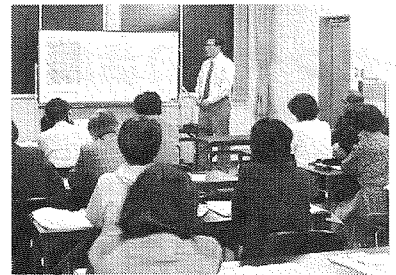
中野三枝子

日本聖公会京都教区京都伝道区信徒伝道協議会と京都教区宣教局社会部との共催で「秋のキリスト教講座」が開かれました。今年のテーマは「私たちにできる共生・共歩」で聖ガブリエル教会と聖公会生野センターとの歴史と活動について3回シリーズで行なわれました。

1回目の10月13日は井田泉司祭（京都教区）に「『日本聖公会と韓国・朝鮮の歴史』～私たちに問われていること～」と題して日本聖公会の戦争責任と、これからも課題として取り組むべきことを講演して頂きました。

2回目の10月20日は宮嶋眞司祭（聖ガブリエル教会、聖公会生野センター運営委員）に「『忘れられていた教会』～聖ガブリエル教会の歩み～」と題して、聖ガブリエル教会を設立された張（チャン）師の献身的な伝道活動のお話を伺いました。宮嶋司祭は開口一番、張師の歴史が即、日韓の歴史といっても過言ではないと述べられ、聖ガブリエル教会の差別と苦難の歴史を語られました。そして日本人の側の問題を見据えて歩みだすことの

中から、はじめて「共に」という言葉が現実性をもってくるのではないのでしょうかと結ばれました。



3回目の10月27日は呉光現さん（聖公会生野センター主事）に「『私たちにできる共生・共歩』～生野センターの現状と課題」と題して講演をしていただきました。センターが生野地域の人々から「聖公会さん」と呼ばれていると聞いて何だかうれしく思いました。聖公会生野センターが設立以来、地域の在日韓国・朝鮮人と共に歩み、担い合う活動してきたことの証のように思えたからです。

一方、私たち教会は聖公会生野センターの活動をどれだけ知っているのでしょうか。聖公会生野センターの活動や聖ガブリエル教会の歴史、日韓の歴史を知ることが教会が新たにエネルギーを得ることになるのではないのでしょうか。

（なかの・みえこ 日本聖公会京都教区宣教局社会部員）

余韻

◆前号で「100万人以上の女性が韓国では売春をしている」と書いたところ、何人かの方から、実際はどうか、と問い合わせがあった。私自身が抱いた疑問の結果を書かず、話を次に展開してしまったからである。すみませんでした。さて『韓国風俗産業の政治経済学』によると、「売春」と書いたところを範囲を広げて、「セクシャル・サービス」と考えている。風俗営業店で得られるセクシャル・サービスはさまざまであるが、ゆきつくところ、お金を払えばセックスが可能となる人たちのことを指し、それらの人が100万人を超えるというのである。もちろん、韓国には政府公認の特定地

域（売春地域）もあって、そこで働く人もいるが、近年数万人に減っているという。このように見ると、日本ではいったい何人の人が「売春」をしていることになるのだろうか。本書が日本で高い評価を受けたのはそのような問いかけを内包していたからだと思う。（高二三）

◆15号からアンケートはがきを同封するようになって、さまざまな方々から感想や質問をいただくようになってとても励まされています。今回の余韻はその質問に高二三さんに答えていただきました。ありがとうございます。どうぞこれからも一言よろしくお願いします。（すずき）

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円（個人） 1口 10,000円（団体）

・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」

・銀行振込 三和銀行 東大阪支店

普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno.po@nssk.org

http://www.nssk.org/province/ikuno

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄